

台灣日本語文學報

31

【刊行の辞】

曾 秋桂 『台湾日本語文學報』31号刊行序文…………… 1

【特別寄稿】

柴田勝二 グローバル時代の日本語文学—村上春樹・多和田葉子・リービ英雄— 3

【論文】

曾 秋桂 村上春樹『1Q84』における天吾と青豆の身体的渴求
—プラトンのアンドロギュノスをベースに—…………… 29

頼 錦雀 日本語コーパスから見た「時」を表す形容詞の意味と文型…………… 55

王 世和 文章における繰り返し語句の一考察…………… 81

黄 意雯 西川満小説における色彩語の研究…………… 105

陳 建璋 台湾人日本語学習者によるテイル用法別の習得研究
—「台湾人日本語学習者コーパス」に基づく縦断調査—…………… 127

落合由治 『台湾日日新報』の掲載広告に見る身体性表象…………… 153

潘 心瑩 音声教育がアクセントの聞き取りに与える影響…………… 179

楊 孟勳 台湾における日本語非専攻学習者の学習困難度と動機づけ…………… 201

【教育研究報告】

李 翠芳 シャドーイング課題文の長さや聴解力の伸び幅の考察
—モノローグ教材を中心に—…………… 227

小林由紀 文学読解におけるピア・リーディングの一考察
—台湾人上級学習者クラスを例として—…………… 247

陳 姿菁 複雑な気持ちを言語化する会話授業の実践
—「恋人に振られた」気持ちを例に—…………… 273

川合理恵 アフレコを利用した自律的な音声学習の有効性と課題…………… 295

【活動彙報】

2012年1月～6月例会要旨および活動報告…………… 321

2012年6月
台灣日本語文學會

台灣日本語文學報

31

台灣日本語文學報31

台灣日本語文學會

2012年6月

2012年6月

台灣日本語文學會

以柏拉圖「雌雄同體」觀點，論述村上春樹《1Q84》男女主角天吾與青豆彼此間的身體渴望

曾秋桂

淡江大學日文系教授

摘要

本論文是以身體論的觀點來論述村上春樹最新長編小說《1Q84》（第一、二、三冊）。因為該篇作品中有許多有關身體語言的表現。

首先從男女主角天吾與青豆兩人各自常出現的身體表現特徵，考察出其為心理的創傷，完全是家庭環境因素所使然。同樣的兒時境遇之下，兩人共同擁有「厭惡的星期天的記憶」、「窩心的教室一瞥的記憶」。因此在分離了20年、也各自擁有性經驗之後的兩人，心中仍然惦念、執意著對方。最後攜手從充滿詭譎的「1Q84」世界逃脫出來，成就了身體交會、心靈合一的最高境界的戀愛故事。再者，從諸多跡象顯示《1Q84》中有柏拉圖《饗宴》篇的影子。特別是兩人執著對方，最終身體交會、心靈合一的結果，正是與柏拉圖《饗宴》篇中，渴望找回失去的身體另一半的「雌雄同體」神話不謀而合。

《1Q84》不只是現代日本社會中常見的感情層次的戀愛問題而已，而是「雌雄同體」神話中，尋求被切割的另一半的身體並渴望回復完整身軀（一半的身體與另一半的身體合體）的戀愛小說。《1Q84》主題與其說是強調精神，倒不如說是朝向追求人類生命根源的課題，最終超越身心二元對立論，而回歸人類原本的面貌（完整身軀）的完美呈現。

關鍵字：《1Q84》 合體 柏拉圖 雌雄同體 超越身心二元對立論

A body desire of Tengo and Aomame in Haruki Murakami's '1Q84': Based on androgynous of Plato

Tseng, Chiu-kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

This paper is mentioning Haruki Murakami's newest long novel "1Q84" (BOOK1, BOOK2, BOOK3) from the body theory. This is because description deeply concerned into the work at the body theory is seen.

The research procedure has sketched each trauma from characteristic body expression of the man hero Tengo and the heroine Aomame at first. And next, the meaning of the joint memory which two persons have is explored. Finally, these two persons who grew up met again and this research explored the meaning of the end which escaped from "1Q84" world and they united. As mentioned above, this research has clarified the process of the story based on Plato's "androgynous."

"1Q84" has not thought the love on an emotional level. This novel is a trial of the love story by the physicality which carries out desire of the partner for the myth of "androgynous" to a model on a corporal physical level. It can be said that "1Q84" is a tale which is going to transcendent mind-and-body dualism and it is going to make go back to the prototype of the "androgynous" which is human being's starting point.

Key words: "1Q84", united, Plato, androgynous,
transcendentmind-and-body dualism

村上春樹『1Q84』における天吾と青豆の身体的渴求
—プラトンのアンドロギュノスをベースに—

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

要旨

本論文は、村上春樹の最新長編小説『1Q84』（BOOK1、BOOK2、BOOK3）を身体論から考察する試みである。身体論を應用する根拠は、作品中に身体論に深く関わった記述が見られるからである。

研究手順としては、まず、男主人公天吾、女主人公青豆の二人の特徴的身体表現から、それぞれ生い立ちから受けたトラウマを素描した。次に、二人が持つ「嫌な日曜日の記憶」、「心暖まる教室風景の記憶」の共同記憶の二人にとっての意味合いを探った。最後に、少年少女から大人に成長した二人が、それぞれ性的遍歴をした後、20年ぶりの再会を果たし、手を取り合いながら一緒に「1Q84」世界から脱出して合体した物語の成就から、プラトンの「アンドロギュノス」に収斂するプロセスを考察した。

『1Q84』は、現代の日本社会で広く理解されているような恋愛を感情的レベルのみの問題とするのではなく、「アンドロギュノス」の神話に見られるように、肉体的身体的レベルで引き裂かれた相手を希求する身体性による恋愛小説の試みである。それは、精神より根元的な人間の生命的次元とは何かという課題を志向する、心身二元論を克服して人間の原点である「アンドロギュノス」という原型（アルキタイプ）に立ち返らせようとする物語だと言えよう。

キーワード：『1Q84』 合体 プラトン アンドロギュノス
心身二元論の克服

村上春樹『1Q84』における天吾と青豆の身体的渴求 —プラトンのアンドロギュノスをベースに—

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

村上春樹の最新長編小説『1Q84』BOOK1、BOOK2、BOOK3(以下、I、II、IIIと略称する)の3冊が2年間(2009、2010)に渡って刊行された。作品中に身体表現に深く関わった記述が見られる。例えば、「人間の靈魂は理性と意志と情欲によって成立している、と言ったのはアリストテレスでしたっけ?」(I P310)と主人公天吾が聞いたのに対して、雑誌編集長小松は「それはプラトンだ」(I P310)と返事している。松本長彦が整理したヨーロッパにおける心身二元論的思想の源流¹を参照すると、この辺りの対話は明らかに身体論の原型の一環だと分かった。また、二人の主人公とも、「スポーツ選手として優秀」(III P200)である。とりわけ「人々の身体と関わることを職業とし」(II P152)、「有能なインストラクター」(II P153)の青豆の仕事は、深く「身体」に関わっている。さらに、「身体」に関する描写も「頭でじゃなくて、身体でそう感じるんです」(I P100)、「精神は今でも身体に染み着いている」(I P267)、「昔の記憶で身体を温めることになりましたから」(I P286)など多様多彩に表現されている。以上から身体論の視点から『1Q84』の主題解読を試みることに有効性が大きいと考えられよう。

研究手順としては、まず、青豆、天吾の特徴のある身体表現からそれぞれの生い立ちから受けたトラウマを素描する。次に二人で共有する共同記憶の青豆、天吾の二人にとっての意味合いを探る。最後に、大人に成長した二人が、それぞれ性的遍歴をした後、再会し

¹松本長彦(2011)「心と身体—ヨーロッパ哲学に於ける心身二元論の考察」『愛媛大学法文学部論集』愛媛大学人文科学編 vol. 30 P103-120

と一緒に「1Q84」世界から脱出し合体した物語の成就から、プラトンのアンドロギュノスに収斂するプロセスを辿り、『1Q84』の主題を見出して結論を導きたい。

2. 主人公達の特徴のある身体表現

「スポーツ選手として優秀」(III P200)な天吾と青豆は、それぞれ特徴的な身体表現を持っている。天吾には「立ちくらみ」、青豆には、「顔をしかめる」と言った身体表現がよく見られる。

2.1 天吾の特徴のある身体表現——立ちくらみ(めまい・発作)

作品中天吾の発作は具体的に4回ほど記述され、そのうち3回は「天吾が生まれてほどなく、病を得て死んだ」(I P43)と父親に言われた母親の映像を伴って現れる。1回目、天吾は「手足はすっかり痺れている。時間の流れがいったん止まる。まわりの空気が希薄になり、うまく呼吸できなくなる。(中略)身体のいたるところから汗がふき出してくる」(I 32)。その時、意識に浮かんだ映像は、天吾が「一歳半のとき」(I 30)の「母親はブラウスを脱ぎ、白いスリッパの肩紐をはずし、父親ではない男に乳首を吸わせていた」(I 30)という記憶である。2回目、年上のガールフレンド安田とセックスする時に映像にある母親と同様に「白いスリッパ」(I P311)を着るよう要求し、母親の「忘我の表情」(I P311)に安田が「どことなく似ていた」(I P311)と天吾は思い、「軽い立ちくらみのような感覚があった」(I P312)。実は、父親の遺物から見出した母親の写真を見て「どことなく年上のガールフレンドに似ていることに思い当たった」(III P445)とあるように天吾は母親の面影を安田に求め、安心感を得ようとしていたことに自分で気づいている。3回目、天吾が空に2つの月が浮かんでいる姿を目撃して、「立ちくらみのような軽いめまい」(II P427)をした時にも、例の母親の映像が現れた。一方、母親の映像を伴わない1回は、ふかえりに連れられて養父の戎野に『空気さなぎ』の改作の意向を伺いに行った時に、戎野が「さきがけ」のコミュニケーションから「あけぼの」が分裂したことを話題にした際に起こした発作である。その発作について語り手は、「ものごとの前

後が入り乱れている。無理に思い出そうとすると、身体全体を強くねじられるような感覚があった」(IP231)と説明している。そうだとすれば、母親の映像もそれに同類している事柄に違いない。実はこの母親の映像(I 173、311、491、493、II 130、179、III P444、445)はよく天吾に思い出されている。成人した天吾は、かつて父親に「あなたの本当の子供じゃない」(II P488)と言ったように、自分が不倫の子だと感知している。結局、牛河が明らかにしたように、天吾の母親は男と駆け落ちをして絞殺された(III P462)のであった。

天吾のような「立ちくらみ」について、身体論では湯浅慎一が「共感覚(le coesthesique)と名付け、ほとんど気分と同一視している」²サルトルの学説を引用して、「気分がこれらの感覚をともなうのは全く偶然にすぎない」³と主張している。しかし、天吾の身体に起きる「パニックにも似た状態」(IP492)の発作と発作中頭に浮かんできた母親の映像とは決して偶然の一致とは思われない。それは、ほかでもなく語り手が説明したように、「母親の脳裏からは自分の存在が、たとえ一時的にせよ消えてしまっているように見える。それはひ弱な彼の存在を根本から脅かす状況」(IP492)であり、いわば「根元的な恐怖」(IP492)に襲われ、生じたトラウマにほかならない。要するに、天吾の発作は自分から母親が奪われそうなトラウマに対面する時に表れる身体的な反応の一つであると同時に、母親を強く渴求するマザーコンプレックスを再現するものだとも言えよう。

2.2 青豆の特徴のある身体表現—「顔をしかめる(歪める)こと」

「顔をしかめる」ことは、青豆の特有な表情だと認められる。勿論、登場人物のうち、あゆみ(IP251)、予備校の秘書(II P39)、天吾(II P220)、小松(III P346)、牛河(III P460)、坊主頭(III P562、564)にも「顔をしかめる」表情は見られるが、青豆ほどよく「顔をしかめる」ことはなく、心情を多義的に託すことはない。

²湯浅慎一(1978)『知覚と身体現象学』太陽出版 P170

³同前掲湯浅慎一書 P170

まず、語り手が言い当てた青豆の「顔をしかめる」習性である。「何かあって顔をしかめると、青豆のそんなクールな顔立ちは劇的なまでに一変した。顔の筋肉が思い思いの方向に力強くひきつり、造作の左右のいびつさが極端なまでに強調され、あちこちに深いしわが寄り、目が素早く奥にひっこみ、鼻と口が暴力的に歪み、顎がよじれ、唇がまくれあがって白い大きな歯がむき出しになった」(IP26、下線部分は論者による。以下同様)。また、「知らない人の前では、決して顔をしかめないように心がけていた。彼女が顔を歪めるのは、自分ひとりのときか、あるいは気にいらぬ男を脅すときに限られていた」(IP26)と語り手は分析している。ここでは青豆にとって「顔をしかめる」ことも、「顔を歪める」ことも、実は同じことである。また、青豆の「顔をしかめる」行為は、「それを目にした相手は、そのすさまじい変容ぶりに肝を潰した」(IP26)とあることから、その脅迫効果は大きい。例として、妻に暴力を振る舞った「石油関係の企業に勤めた」(IP68)男を殺した後、バーに入って「髪が薄くなりかけている中年男」(IP104)をセックスに誘った時、相手の非常識な反応に対して青豆は「抑制しながら顔をしかめ」(IP114)、さらに「呼吸を止め、かなり大胆に顔をしかめた」(IP114)ことで、中年男は「息を呑んだ」(IP151)。その表情に「大抵の男は縮み上がってしまう。小さな子供なら小便をもらすかもしれない。彼女のしかめ面にはそれくらい衝撃的なものがあった」(IP115)と、語り手が説明したように他人を圧迫する脅迫性がある。要するに「顔をしかめる」ことは、青豆が他人を拒絶し、威嚇しようとして表す表情であり、青豆の生い立ちから見れば、自分を守る自己防衛の手段だとも言えよう。牛河が明かしたように、青豆は「十一歳のときに自ら家族との絆を断ち切って、それ以来おおむね独力で生きてきました。叔父さんの家に一時的にやっかいになったが、高校に入る頃には事実上自立しています。たいしたもの。強い心を持った女性」(III P16)である。しかし、天吾の目に映った小学校生の青豆は、もともと「感情を顔に出すこともな」(IP270)く、「学校ではまるで

透明人間のような扱いを受けている。誰も彼女に話しかけようとし
ない」(I P275)存在であった。だが、手を握られた天吾には青豆に
潜む「人並外れて強靱な力」(II P87)が感じられた。その「強靱な力」
の故、学級で苛められて、「無表情」(I P271)だった青豆は人を脅か
す「顔をしかめる」表情を身に付けた青豆に変化した。「顔をしかめ
る」行為は青豆の一つの自己防衛の表情だと理解されよう。

自己防衛の手段以外に、「顔をしかめる」ことは、青豆にとって
は文字通り「顰蹙する」場合もあるが⁴、教祖を殺す場面では、教祖
が十才の少女達をレイプすることに対して、「体内で続いている激し
い感情的な対流を、どのように鎮めればいいのか、青豆にはわから
なかった。彼女の顔は歪められ」(II P242-243)たり、「混乱し、叫び
出したくなったときによくそうするように、彼女は大きく顔をしか
めた」(II P434)りして、抑えきれない強い感情に当惑し、混乱をきた
す場合にも青豆は顔をしかめることがある。特に、閉じこもった
マンションから児童公園に現れた天吾を見かけた時、「身体のスステ
ムが混乱をきたしている。意思と行為がうまくつながらない。もう
一度その男をよく眺めなくてはと思う。しかしなぜか目の焦点をあ
わせることができない。なんらかの作用によって、左右の視力が突
然大きく異なってしまったみたいだった。彼女は無意識に大きく顔
を歪める」(II P438)とあるように、「意思と行為がうまくつながら
ない」ゆえに身体に引き起こす「顔をしかめる」表情もある。

このように、青豆の「顔をしかめる」表情は、人を脅かそうとし
て強く見せる自己防衛の手段であるほか、理解に苦しみ、抑えきれ
ない感情を内包する時に身体に引き起こされる多義的な意思表示だ
と見られる。顔の筋肉を一定のパターンで緊張させ、「顔をしかめる」
青豆の表情は、正に市川浩が「さまざまな心理状態といわゆる精神

⁴それは自分の体に対して、「乳房は大きさが足りないし、おまけに左右非対称だ。陰毛は進行する歩兵部隊に踏みつけられた草むらみみたいな生え方をしている。彼女は自分の身体を目にするたびに顔をしかめないわけにはいかなかった」(I P326)のような場合である。

の姿勢を用意する」⁵と説明したことに符合している。とりわけ、人を脅迫するほど過激なものを持つ「顔をしかめる」表情へと大きく変貌した青豆が子供時代に実は苛められ「無表情」(IP271)だったということから考えれば、「顔をしかめる」表情は子供時代に抱えたトラウマからの反動だと見てもよからう。

このように、天吾の「立ちくらみ」も青豆の「顔をしかめる」表情は、子供時代に抱えたトラウマの延長だと言っても過言ではない。

3. 天吾と青豆との共同記憶

「小学校の三年生と四年生の二年間、同じクラスにいた」(IP270) 天吾と青豆は共同記憶を持っている。それは、「嫌な日曜日の記憶」と「心暖まる教室風景の記憶」である。

3.1 嫌な日曜日の記憶

NHKの集金人を父に持ち、「幼稚園に入る前から始まり、彼が小学校の五年生になるまで」(IP166)日曜日の朝から夕方までに、集金に連れ回された(IP168)ことは、天吾にとって「苦痛で」(IP186)、「嫌な記憶しかない」(III488)。一方、宗教団体「証人会」の信者を母に持ち、布教活動に連れ回された青豆は「無表情」(IP271)であった。日曜日の通りですれ違ったこの二人は、「視線を交わす」(IP272)だけだったが、「天吾は心の中では彼女に同情していた」(IP273)と同時に、二人の間に「特異な共通点」(IP273)を見出した。それは、「そんな役割を押し付けられることがどれほど深く子供の心を傷付けるものか」(IP273)ということにもなろう。日曜日をめぐる記憶は、子供時代から二人とも抱えている苦い共同記憶に違いない。それは二人の過去を洗い出した牛河が「二人はおそらく同じように孤独で、同じように強く何かを求めていたはずだ。無条件で自分を受け入れ、抱きしめてくれるような何かを」(III209-210)と見たように、孤独者同士が相憐れむ心情でもあろう。

3.2 心暖まる教室風景の記憶

⁵市川浩(1977・初1975)『精神としての身体』勁草書房 P63

「四年生の秋」(IP273)に理科の実験のクラスで「同級生からきつい言葉を投げかけられていた」(IP273-274)青豆に、天吾は「自分の班に移って来るように」(IP274)と言って助けた。そして「よく晴れた十二月初めの午後」(IP275)に、二人しかいない教室で青豆は天吾の側に来て天吾の手を握った。その時の情景を語り手は次のように語っている。重要な伏線のため、長い引用をしておく。

窓の外には高い空と、白いまっすぐ雲が見えた。放課後の掃除が終わったあとの教室で、天吾と彼女はたまたま二人きりになっていた。ほかには誰もいなかった。彼女は何かを決断したように早足に教室を横切り、天吾のところにやってきて、隣に立った。そして躊躇することなく天吾の手を握った。そしてじつと彼の顔を見上げた。(天吾の方が十センチばかり身長が高かった)。天吾も驚いて彼女の顔を見た。二人の目が合った。天吾は相手の瞳の中に、これまで見たこともないような透明な深みを見ることができた。その少女は長いあいだ無言のまま彼の手を握りしめていた。とても強く、一瞬も力を緩めることなく。それから彼女はさっと手を放し、スカートの裾を翻し、小走りに教室から出ていった。(IP275-276)

この教室風景が二人の間で長く鮮明に記憶され、二人の再会を果たすポイントとなる。人間の持つ記憶を「生活の有用性に向って組織された学習的記憶」⁶と「感情的色合いと日付を伴う歴史的(自然発生的)記憶」⁷の2種類に分けたベルクソンの知見を引用し、後者が「生活の必要に応じて自動的に再認される学習的記憶の層より深い無意識層に存在している」⁸と、湯浅泰雄は説明している。その後二人の間で度々クローズアップされたこの「教室風景の記憶」は、

⁶湯浅泰雄(1981・初1977)『身体—東洋的身心論の試み—』創文社 P235

⁷同前掲湯浅泰雄書 P235

⁸同前掲湯浅泰雄書 P234

確かに青豆、天吾の二人の無意識層に存在している記憶に違いない。20年の歳月が流れ、再会を果たせた場面は、「二人は凍てついた滑り台の上で無言のまま手を握り合った。彼らは十歳の少年と十歳の少女に戻っていた。孤独な一人の少年と孤独な一人の少女だ。初冬の放課後の教室」(ⅢP551)とあるように再生されている。少年少女時代から孤独を共通項に持った二人が20年かけて相互に捜し求めていた結果、手を取り合いながら「1Q84」世界から脱出できた時点で、「私たちはもう孤独ではない」(ⅢP593)と言えるようになったのである。孤独者同士の二人が会おうと思う信念は、とりもなおさず、この心暖まる教室風景の記憶から生まれたものである。

3.2.1 天吾にとっての、青豆に左手を握られた思い出

手を握り合った天吾の場合であるが、教室風景の記憶を、29才の天吾は「青豆はそのとき、彼の一部を持って行ってしまったみたいに思える。心か身体の一部を。そしてそのかわりに、彼女の心か身体の一部を、彼の中に残していった。ほんの短い時間に、そういう大事なやりとりがなされたのだ」(ⅡP94)と見ている。ここでは、手を握り合った天吾と青豆の二人が、「心か身体」の一部分を相手に残し、文字通り片割れとなっていることに注目したい。

青豆に「左手」に握られて以来、天吾に「その少しあとに精通があっ」(ⅡP86)たが、「十歳の天吾はセックスについて具体的なイメージを持たなかった。彼が少女に求めるのは、できるならもう一度手を握ってほしいということくらいだった。二人きりで、ほかの誰もいないところで、自分の手を強く握ってほしい」(ⅡP88)という欲求を心に持ち続けていた。このように、青豆に左手を握られ「ほどなくはっきりした勃起と精通を経験した」(ⅡP384)りしたことを、語り手は、「天吾にとっての人生の一つの転機となった」(ⅡP384)と意味付けている。言い換えれば、青豆に左手を握られた天吾は、一人の少年から一人の男性へと成長したのである。さらに、その左手を青豆に握られた効能としては、「この世界で自分は孤独なのだと思う」(ⅡP385)天吾を、「常に変わることなく勇気づけてくれた。大

丈夫、あなたには私がいる、とその手は告げていた。あなは孤独ではない」(ⅡP386)とあるように、天吾の孤独な心を支えてくれたのである。

ちなみに、作品中、青豆以外に、天吾が左手をふかえりに握られた様子が天吾を連れて養父戎野に会いに行く場面(ⅠP186、P205、P206)、記者会見の打ち合わせが終わった場面(ⅠP374、P375)、天吾の見た夢の場面(ⅠP376)、書き換えられた『空気さなぎ』のために天吾に礼を言う場面(ⅠP426)、雷鳴の中のセックス場面(ⅡP305、P306、P307)にあるが、それは、いずれも性的行為に繋がっていく傾向が見られる。一方、父の療養所の看護婦安達クミにも手を握られた(ⅢP123、P169、P170、P171、P181)が、はっきりと左手と書かれていないため、判断しようはないが、手を握られた時の天吾は「小学校の教室と青豆のことを思い出した。感触は違う」(ⅢP169)と取り立てて説明し、結局「性欲を感じなかった」(ⅢP183)と終わってしまった。これらを傍証として、青豆に「左手」を握られたことによって、天吾は性に目覚めたばかりではなく、彼の性欲を表現する暗号としても使われるようになったのである。

3.2.2 青豆にとっての、天吾の左手を握った思い出

手を握り合った後の青豆の場合であるが、「生理が始まったのは、小学校の教室で天吾の手を握った数ヶ月後だ。その二つの出来事のあいだには確かな関連性があるように思えた。天吾の感触が、青豆の肉体を揺さぶったのかもしれない。(中略)彼女(青豆のこと・論者注)は一人で新しい世界に足を踏み入れたのだ」(Ⅲ216)と、語り手は説明している。青豆も天吾と同じように「手を握る」ことを契機に一人の少女から一人の女性へと成長し、性に目覚めたことが判明した。その手を握る事件の後、青豆自身は、「一生彼(天吾・論者注)を愛し続けることを誓った」(ⅠP402)。この天吾への気持ちを青豆は友人の婦人警官あゆみに「彼(天吾・論者注)に会いたい。死ぬほど会いたい。それだけは確かなことみたいね。それだけは自信を持って言える」(ⅠP527)と言い、老婦人にも「私にとって何より重要

なのは、自分が彼を心から深く求めているという事実です」(II P21)と言っている。「私という存在の中心にあるのは愛だ。私は変わることなく天吾という十歳の少年のことを思い続ける。彼の強さと、聡明さと、優しさを思い続ける。彼はここには存在しない。しかし存在しない肉体は滅びないし、交わされていない約束が破られることもない」(II P113)と、青豆は手を握ってから生まれた自分の天吾への愛を固く信じている。

このように、手を握り合うという思い出は、天吾と青豆にとって生涯を方向付けるとも言える大きな意味のある行為である。1 つには、「精通」、「生理」を経験したように 2 人は少年少女から正真正銘の男女へと踏み出した第一歩として記念すべきものである。2 つには、孤独者同士が互いを必要とし、青豆が孤独な自分を支えてくれると天吾は信じるようになり、青豆は天吾を心より愛していることを意識するようになったことである。

4. 成人した後の主人公達の性的遍歴

成人した天吾と青豆は再会するまで、性欲を持ち、それぞれの性的遍歴をしてきた。以下、それぞれの場合を見てみよう。

4.1 天吾の場合

青豆に手を握られたことによって性欲に目覚めた天吾は少年から「立派な性欲もある」(I P324)青年に成長した。そして、「ときどき彼女のことを考えながらマスターベーションをした。彼はいつも左手を使った。握られた感触がまだ残っている左手だ。記憶の中では青豆はやせっぽちの、まだ胸も膨らんでいない少女だった。しかし彼は彼女の体操着姿を思い浮かべながら射精することができた」(II P90)とあるように、青豆に握られた「左手」は、丸で天吾の性欲を触発するスイッチのような働きを持つようになったのである。

成人後の天吾にとって「性欲」とは、語り手が説明したように、「基本的にはコミュニケーションの方法の延長線上にあるものだ。だからコミュニケーションの可能性のないところに性欲を求めるのは、彼にとって適切とは言いがたい行為だった」(II P296)のである。

青豆と20年ぶりに再会するまで実在の女性を相手にして、予備校の女生徒(IP91)2回を含め、「これまでに十人ばかりの女性たちとつきあって、性的な関係を持ったが、誰とも長続きはしなかった」(I452)と天吾は告白した。作品中で青豆以外に性的接触を持った相手は10才年上のガールフレンド安田、看護婦の安達クミ、ふかえりの3人である。以下、順番に見てみよう。

4.1.1 年上のガールフレンド安田

「年上の女性と一緒にいると、不思議に落ち着くことが出来た」(IP324)天吾は、「一年ばかり前十歳年上の人妻」(IP92)と性的関係を持つようになり、「生身の女性に対する欲望(あるいは必要性)のようなものはおおかた解消された」(IP92)。前述の天吾の特徴のある身体表現の項目で見た通り、安田と性的行為を行っている時、母親の映像を伴ったことから、母親の面影を安田に求め、安心を得ようとしたことが分かった。また、「性的パートナーとして文句のつけようがなかった」(IP450)安田は、「性行為の大半の部分をリードした」(IP493)。そうした関係の中、一度「ふかえりの寝顔を思い浮かべ」(IP495)ながら、「ガールフレンドの口に激しく何度も射精した」(IP495)が、「天吾の中にある一週間ぶんの性欲を、いつもどおり手際よく引き出し、てきぱきと処理していった」(IP544)安田に天吾は満足している。安田の夫からもらった電話で「家内は既に失われてしまった」(II P127)と告げられた最後、安田の姿は消えてしまったのである。母親との間で不倫を共通項に見出した安田は、一時的に母親の面影を求める対象とはなっていたが、所詮天吾にとって「愛していたわけでは」(II P131)なく、「激しい心の震えのようなものを感じたこともない」(II P131)、性的パートナーに過ぎないのである。

4.1.2 ふかえりが天吾のためにした「オハライ」

ふかえりに最初に会った天吾は、「激しい心の震えのようなものを感じた」(IP92)。その時に、「恋心とか、性的な欲望とか、そういうものではない」(IP92)と天吾は、否定したが、戎野に挨拶に連れ

て行ってもらう途中も、記者会見の打ち合わせのために3回目ふかえりに会った後も、天吾はふかえりに「左手」を握られた。特に3回目に会い、「左手」を握られた後、ふかえりの「きれいなかたちの胸」(I P375)を思い浮かべて、「そこからは性的な意味すらほとんど失われてしまっている」(I 375)と天吾は再度否定した。しかし、その直後安田の「声が無性に聞きたかった。できることなら、すぐにでもどこかで会ってセックスをしたかった」(I P375)とあるように、天吾の性欲はふかえりに触発された。また、その後『空気のさなぎ』の成功で戒野を伴い、札に来たふかえりに要求され、天吾の下宿に泊まることになった。その後、下宿に泊まった「ふかえりの寝顔を思い浮かべ」(I P495)ながら、「ガールフレンドの口に激しく何度も射精した」⁹(I P495)ことを考えれば、天吾自身が否定したにも拘わらず、ふかえりに心を惹かれてしまったことは確かである。天吾の下宿に泊まった翌日から姿を消したふかえりが再び天吾の下宿に姿を見せたのは、天吾が父親の療養所から帰ってきたその夜であった。ふかえりは天吾のために「オハライ」(II P298)をすると言い、雷鳴の中で天吾と肉体関係を結んだ。「ふかえりは右手を伸ばし、天吾の左手を握」(II P305)る中で天吾は、「十歳で、小学校の教室にいた」(II P305)ことに気づき、「射精していることを知った」(II P307)。「激しい射精がひとしきり続いた」(II P307)中、ふかえりは「蜜を吸う虫のように、天吾の精液を最後まで効果的に絞り取った」(II P309)。そして性行為が終わった後、「彼の心の一部はまだ小学校の教室にあった。彼の左手には、少女の指の感触が鮮やかに残っていた」(II P309)とあるように、天吾をして「青豆に会わなくてはならない」(II P309)と思わせた契機となったのである。結局、結ばれた天吾と

⁹この場面を平居謙は「フェラチオの形而上学」として取り上げた。平居謙(2010)『村上春樹の『1Q84 BOOK3』大研究』データハウス P142 では、「村上春樹の小説の中におけるフェラチオは「精神と肉体」「死と生」「ある世とこの世」のように対極にあるものを融合する位置或いは融合するためのキーパーソンがそれを行うものだという仮定のもとで今読み進めているからなのだが」と結論付けている。

ふかえりとの肉体関係は、雷鳴のある「あの混乱の夜、この世界に何らかの作用が働き、天吾は私の子宮の中に彼の精液を送り込むことができ」（ⅢP219）、青豆が天吾の子供を「性行為抜きで妊娠」（ⅢP218）する結果をもたらしたのである。こうした現実にはありえない理不尽なことを語り手は「ふかえりはおそらく通過するものだった。それがあの少女にそのときに与えられた役割だったのだ。自分自身を通路にして天吾と青豆を結びつけること。限られた時間、物理的に二人を連結させること」（ⅢP578）と解釈し、天吾に悟らせた。

このように、最初にふかえりに「心の震え」を感じた天吾は、それと性的意味との連結を頭から否定しようとしたが、結局、性的に目覚めた教室風景の記憶が天吾に潜在していた故に性欲のスイッチの「左手」をふかえりに握られた途端、天吾は性的意味でふかえりを見るようになった。一度、ふかえりの寝顔を思い浮かべながら、安田と性的行為をしたことは、その証拠の一つであるが、いずれも青豆に「左手」を握られたことで記憶が作用し、青豆と天吾との間に「通路」の役割しか持たないふかえりとの連結が出来て、さらにふかえりを通して青豆に会わなければならないと思うようになった。天吾の子供は、実にふかえりが「オハライ」する最中に青豆と「性交抜きで受胎した」（ⅢP160）のである。

4. 1. 3. 看護婦の安達クミと「ハシッシ」の世界へ

千倉の療養所にいる父親を看病中、一度看護婦安達クミに誘われ、天吾は彼女の部屋に泊まった。安達の誘いで「ハシッシ」（ⅢP174）を吸った天吾の頭に教室風景（ⅢP182、P185）が2回浮かんできた。「天吾は性欲を感じなかった。安達クミの方もとくに性欲を感じているようには見えなかった」（ⅢP183）。二人の男女は性行為なしに一晩を共に過ごした。それにしても「ハシッシ」に浸っている中で青豆に向かって「君に会いたかった」（ⅢP182）と奥深く潜んだ願いが初めて「遠くたどたどしい」（ⅢP182）声と化し、聞こえるようになったのである。

以上見てきたように、「1Q84」の世界を脱出後、赤坂のホテルで

青豆と合体するまで、具体的性的関係を結んだ女性は安田、ふかえり、安達の3人である。安田は天吾にとって不倫した母親と重なって見える対象であると共に性欲を満足させてくれる性的パートナーに過ぎない。一方、ふかえりと安達とは天吾が青豆を心に思ったことを行動に出させる契機となる、触媒的な性的関係の相手である。

4.2 青豆の場合

天吾の「左手」を握ったことによって性欲に目覚めた青豆は「初潮」(IP402)を迎え、少女から女性に変わった。「二十六になるまで処女だった」(IP339)青豆は、「ときどき自慰行為をした」(IP299)。青豆がした「自慰行為」で、リーダーが指摘したように「君は今でも、自慰行為をするときに天吾くんのことを考える。彼の姿を思い浮かべる」(IP281)ことになる。そして、「無二の親友」(IP292)環の夫を殺した後、「周期的に、そして激しく男の身体を求めるようになった」(IP302)。人殺しを仕事に兼ねた青豆は、「性欲の高揚が精神的な緊張によってもたらされたものなのか、それとも彼女の中に蓄えられた卵子たちの発する自然な呼び声なのか、遺伝子の屈折した企みなのか」(IP444)に判断がつかないが、成年の青豆にとって「セックス」とは、「彼女の身体によい影響を与えたようだった。男に抱かれ、裸の身体を見つめられ、撫で回され、舐められ、嘔まれ、ペニスを挿入され、オーガズムを何度か体験したことで、身体の中にあつたわだかまりのようなものがうまくほどけていた」(IP281)のである。青豆と肉体接触のあつた相手を以下順番に見てみよう。

4.2.1 環とのレズビアンのような真似

「孤独な少女たち」(IP293)の青豆と環とは、高校時代の夏休みの旅行中、「ホテルのベットの中で、お互いの裸の身体を触り合った。あくまで突発的な一度きりの出来事であり、二度と繰り返されなかったし、それについて口にされることもなかった。しかしそのことがあつて二人の関係はより深く、より共謀的なものになった」(IP293)とあるように、「レズビアンのような真似」(IP58)をして、二人の

関係が深まっていった。夫の暴力に耐えられず自殺を選んだ環の死後、青豆は環の夫を殺した。青豆が人殺しに手を染めたのも、恐らく親友の環の故であろう。このように、孤独な少女同士青豆と環は、異性に近づく前に同性の温もりを求め合う行動パターンが分かる。

4.2.2 行きずりのセックス行為

「二十六になるまで処女だった」(IP339)青豆は、「ときどき自慰行為をした」(IP299 I)。26才以後、「月に一度」(IP327)で、行きずりのセックスの相手を探す。天吾のことを心より愛しているのに、「ほかの男たちとセックスをするのはべつにかまわないんだね」(IP341)とあゆみに聞かれた時、青豆は、「そんなのはただ通り過ぎていくだけのものだから、あとには何も残らない」(IP341)と答えた。湯浅慎一は「肉欲に身をゆだねることは、自己を自己の滞留性の中に埋葬するという投企である」¹⁰と説明しているが、青豆の場合は、まさに「時々たまらなく男たちと寝たくなるのは、自分の中ではぐくんでいる天吾の存在を、可能な限り純粋に保っておきたいからかもしれない。彼女は知らない男たちと放埒に交わることによって、自分の肉体を、それを捉えている欲望から解放してしまいたかったのだろう。その解放のあとに訪れるひっそりとした穏やかな世界で、天吾と二人だけで、何ものにも煩わされることのない親密な時間を過ごしたかった。おそらくはそれが青豆の望むことだった」(IP113)と理解している通り、青豆は行きずりのセックス行為はただ性欲の解消に使うだけであり、天吾のために心の中に特別な純粋なスペースを空けておいていようとした。ここから、天吾に再会するまで青豆は一般的な性欲解消と明確に区別して、天吾との関係を出来るだけ純粋に保ちたいという信念を持っている。

4.2.3 婦人警官あゆみとの「性的饗宴」

青豆は、六本木にある「シングルス・バー」(IP237)で婦人警官あゆみと知り合い、その晩に二人で組んで、行きずりのセックスの

¹⁰同前掲湯浅慎一書 P260

相手を探した。目標とした男とセックスをただけではなく、酔っぱらいの青豆はあゆみと「レズビアン你真似」(IP346)をした。それ以後、「青豆とあゆみはこちんまりとした、それでも十分にエロティックな一夜の饗宴を立ち上げるには、理想的と言ってもいいコンビだった」(IP511)とあるように、二人は行きずりのセックスの相手を探すにはいいコンビで、青豆が回想したように「無敵のセックスマシーン」(IP102)であった。しかし、6月の終わりに立ち上げようと試みた「性的饗宴」(IP512)が最後となり、あゆみは渋谷のホテルの一室で、「バスロープの紐で首を絞られ、殺害されていた」(IP84)のである。青豆が自分を分析したように、「自分の身を護ろうとする本能が強く、それに加えて大塚環の記憶を汚すまいという意識が強すぎた」(IP102)ため、あゆみの心持ちを受け止めなかったが、「大塚環がこの世を去って以来、青豆がいささかなりとも友情に似た気持ちを抱ける相手は、あゆみの他にはいない」(IP100)と自己認識した。このように、青豆にとってあゆみは行きずりのセックスの相手を探す楽しみ、いわば「性的饗宴」を分かち合う仲間であると共に、親友環の死後、初めて友達となりえた人物なのである。

4.2.4 性行為抜きで天吾の子供を妊娠した青豆

前述のように、青豆と天吾との間で「通路」の役割を果たしたふかえりの存在により、青豆は「処女懐胎」(IP218)し、天吾の子供を妊娠した。この事実を悟る前に、天吾とふかえりとの共同作業によって完成した「リトル・ピープルの及ぼすモーメントに対抗する抗体としての役目を果たした」(IP284)『空気なさぎ』を教祖に教えてもらった青豆は、その著作を読むと、「天吾の立ち上げた物語の中にいることになる、と青豆は思う。ある意味では私は彼の体内にいる。彼女はそのことに気づく。いわば私はその神殿の中にいるのだ。(中略)私は天吾の血液の中において、その身体を巡っている」(IP422)。また、「私は今、天吾くんの中にいる。彼の体温に包まれ、彼の鼓動に導かれている」(IP423)ように、青豆は天吾の一部分の存在となったと感知している。さらに、隠れた6階建てのマンショ

ンから児童公園の滑り台に上がっていた天吾を見かけた時に、「私の心と身体を大きくかき回していったのだ。内臓や子宮の奥まで」（P461）と感じた青豆の体には、後になって判明したことだが、「内臓や子宮の奥まで」と示唆するように、既に天吾の子供を受胎していたのである。

このように、友情に似た気持ちを抱いた相手の環とあゆみとの間に青豆は、いずれも「レズビアン我真似」をして、同性との絆を強めたと見られる。一方、異性に近づき、行きずりの男とのセックスをすることによって、性欲の欲求を解消した青豆は、天吾に与える純粋なスペースをきちんと確保している。

5. プラトンの「アンドロギュノス」の世界へ収斂しつつ

上述してきたように、子供時代にトラウマを抱えた天吾と青豆は、執拗なほどに「教室風景の記憶」に拘り、相手を捜し求め続け、再会できた。このように『1Q84』は確かに今まで言われてきたように「ピュアな恋愛小説」¹¹、「純愛小説」¹²である。しかし、何故あれほど執拗に「教室風景の記憶」に拘らなければならないかという点は、なお理解に苦しむ所である。それはプラトンの『饗宴』篇に触れられた「アンドロギュノス」を借用すれば、一層理解できる。何も無理してプラトンの『饗宴』篇を持って来て解釈することもなからうが、作品中で使われる「饗宴」、「性的饗宴」という言葉遣い、そして天吾と青豆に限って見られる「二つに裂ける(ちぎれる)」表現などの手掛かりは、プラトンの『饗宴』篇を意識して書かれたことを示唆している。実は、既に『1Q84』より一つ前の長編小説『海辺のカフカ』(2000)では、プラトンの『饗宴』篇に触れて、「昔の世界は男と女ではなく、男男と男女と女女によって成立していた。(中略)神様が刃物を使って全員を半分に割ってしまった。きれいにまっ

¹¹同前掲平居謙書 P164

¹²風丸良彦(2010)『集中講義『1Q84』』若草書房 P61

ぶたつに。その結果、世の中は男と女だけになり、人々はあるべき残りの半身をもとめて、右往左往しながら人生を送るようになった」（上、第5章 P65-66）としている。これは、後述するプラトンの『饗宴』篇にある「アンドロギュノス」の話とは、内容的に相違はない。

プラトンの『饗宴』篇は、「悲劇詩人アガトンの作品上演の優勝を記念する祝宴に、友人たちが集い、エロース(恋)を称える演説を各人が行うという趣向で構成されている」¹³。その中で、喜劇作家アリストファネスは、「もともと非理性的なものである恋の情念を、人類の過去の状態に起因することとして、奇抜な構想を用いて神話的に説明する」¹⁴。喜劇作家アリストファネスによると、「人間はかつて男・男、女・女、男・女であった。それが二つに切り裂かれているのが現状である。それゆえ、人はそれぞれ、過去の半身を求めて、ある男は男に、ある女は女に、ある男は女に、ある女は男にそれぞれ恋い焦がれるのだという」¹⁵。加藤信朗はこれを「恋の情念の非合理性と根源性を語り明かす力をもっていることは間違いない」¹⁶と主張している。また、柴田勝二はこのプラトンの『饗宴』を元に二人を自分の欠如を求める「エロスの存在」と見ている¹⁷。しかし、エロスの存在のような感情的精神的存在というより、この『饗宴』篇で想定される人間の原初的な姿「アンドロギュノス」(androgynous、両性具有者)のほうが、二人の作品中に終始見られる身体論的表現を理解するには、より適切であろう。「アンドロギュノス」とは、「人間の祖先の形とされる、男女が一体となった球体の姿。神の怒りに触れて二分にされて以来、男女は互いに求めあうようになったとす

¹³加藤信朗(1996)『ギリシア哲学史』東京大学出版会 P117

¹⁴同前掲加藤信朗書 P117

¹⁵同前掲加藤信朗書 P117

¹⁶同前掲加藤信朗書 P117

¹⁷柴田勝二(2011)『村上春樹と夏目漱石—二人の国民作家が描いた<日本>』祥伝社 P258-259

る」¹⁸ものだそうである。一体となっている人間二人がゼウスにより一人一人に分割されたため、互いにその片割れを恋い慕うようになり、恋愛が発生した、『饗宴』篇に触れられた「アンドロギュノス」をベースにすれば、天吾と青豆の二人がどうしても再会しなければならない背景を、以上考察してきた身体論的表現とともに理解する上で役立つであろう。だが、果たして『1Q84』にプラトンの「アンドロギュノス」の援用が有効なのかについては、以下に検証しよう。

まず、『1Q84』の天吾と小松との対話では、「プラトン」の名前が名指されていることが挙げられる。次にあゆみと行きずりの男を捜す青豆を記述する場面では、「饗宴」、「性的饗宴」のように、プラトンの『饗宴』篇の名前がそのまま使用されていることが見られる。また、他の登場人物ではなく、主人公天吾と青豆の二人だけに限って、「二つに裂ける」(ちぎれる)ような表現がされていることに特に注目したい。例えば、青豆が天吾を初めて見かけた時に、「彼女は自分の激しい息づかいを聞いていた。彼女の身体がいつの間にか、真ん中から二つに裂けてしまったようだった。一方の半分は天吾が目の前にいるという事実を進んで受け入れようとしていた。そしてもう一方の半分は、その事実を受けていれることを拒否し、どこか見えないところに押しやっ飛ばしておうとしていた。そんなことは起こってもいないのだ、と思いきもうとしていた。その正反対の方向に向かう二つの力が、彼女の中で激しくせめぎ合っていた。どちらもそれぞれの目指すところに激しく彼女を引っ張っていきおうとしていた。いたるところで肉がちぎれ、関節がばらばらになり、骨が砕けてしまいそうだった」(II P439-440)とある。また、青豆が天吾を思う時に、「青豆は何があっても彼と再会したい。そして彼に抱かれ、

¹⁸日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部(2000)『日本国語大辞典』第二版第1巻小学館 P739

隅々まで愛撫されたい。それがかなわないかもしれないと考えるだけで、心と身体が真ん中から二つに裂けてしまいそうになる」(Ⅲ93)とある。一方、天吾の場合も同じである。児童公園で青豆が会いたいとの連絡が入った時に、天吾は「一時間ばかり天井を睨みながら、相反する二つの感情のあいだを行き来した。彼は何よりも青豆に会いたかった。それと同時に、青豆と顔を合わせるのがたまらなく怖かった。そこに生まれるかもしれない冷ややかな失望と、ぎこちない沈黙が彼の心をすくませた。身体が真ん中からきれいに二つにちぎれてしまいそうだった。普通の人より柄が大きくて頑丈だが、自分がある方向から加えられる力には思いのほか脆いことを天吾は知っていた。しかし青豆に会いにいかないわけにはいかない。それは彼の心がこの二十年間、強く一貫して求め続けてきたことだった」(ⅢP545)とある。しかし、「二つに裂ける」や「二つにちぎれる」ような表現は、他の登場人物の場合には一度も見られない。例えば、青豆は親友の環の死に際して、「もう彼女と会って話をする事ができないのだと思うと、身体を引き裂かれたような気持ちになる」(ⅠP291)と表現されている。あるいは、教祖にレイプされたつばさに心を掛けた老婦人がつばさの失踪を知り、「身体の一部をもぎ取られたような気持ちです」(Ⅱ16)とある。要するに、「二つに裂ける」、「二つにちぎれる」ような表現は天吾と青豆との間にしか見られないことは、決して偶然的ではなく、意図的な所作だと察せられる。天吾と青豆との恋愛物語を主とした『1Q84』は、「アンドロギュノス」の片割れと想定される二人が、「教室風景の記憶」に執着し、自分の片割れを必死に捜し求める中で、遍歴の末に片割れを見つけ出した恋愛物語であると同時に、プラトンの『饗宴』篇を動機説明に使う意図的装置として、二人が身体論的遍歴から回復に向かう成長物語だとも言えよう。

6. 結論

『1Q84』は現在3巻に及ぶ長編小説で錯綜した複雑なストーリーが様々な謎を呼ぶ作品とされている。しかし、身体論の視点で見ると、基本のプロットは非常に明晰判明なことが今回の考察から分かった。そこには少なくとも二つの仕掛けがなされている。第一は、以上たどってきたように、『1Q84』は現代の日本社会で広く理解されているような恋愛を感情的なレベルのみの問題ではなく、「アンドロギュノス」の神話に見られるように、肉体的身体的レベルで引き裂かれた相手を希求する身体性による恋愛小説の試みという点である。そこでは、精神より根元的な人間の生命的次元とは何かという課題が志向され、『1Q84』はプロットとして、心身二元論を克服して人間の原点である「アンドロギュノス」の原型（アルキタイプ）に立ち返らせようとする物語とも言える。第二は、身体論から見ると、

『1Q84』の天吾と青豆の恋愛は、実は精神的作用を身体的行為が支配しており、身体は行為する物質的空間と感応していると言える。ふかえりを媒介にして空間的に離れている天吾が青豆を受胎させたのも、身体性＝世界性の開示あるいは時空的感応という前提があれば理解できないことではない。こうした動きは、東西を問わず模索されて来た。以上の身体論をもとに『1Q84』をありえないような再会の物語として見れば、起こりえないような偶然の一致が生じる現象について、「意味のある不思議な暗合（シンクロニシティ）」という概念を1950年代に精神分析学者のユングは物理学者パウリと共同で提起したことが思い出される¹⁹。それも、いわば世界の運動＝身体・精神との連動という枠組みによる今までの心身二元論を超える試みの一つだったと言えよう。Book4の出版が噂されているが、村上春樹がBook3までの「アンドロギュノス」の神話を今後どのように扱うのか、興味は尽きない。

（当論文は輔仁大学日本語学科が主催した「文化における国際シンポジウム

¹⁹C.G. ユング・W. パウリ著河合隼雄・村上陽一郎訳（1976）『自然現象と心の構造—非因果的連関の原理』海鳴社

「文化における身体」(2011. 11. 09)での発表を加筆、修正したものである。)

テキスト

村上春樹(2009)『1Q84』BOOK1. 2 新潮社

村上春樹(2010)『1Q84』BOOK3 新潮社

参考文献

プラトン著呉錦裳訳(1964)『饗宴』協志工業叢書出版

W. K. C. ガスリー著式部久・澄田宏訳(1996・初 1973)『ギリシアの哲学者たち』理想社

市川浩(1977・初 1975)『精神としての身体』勁草書房

C. G. ユング・W. パウリ著河合隼雄・村上陽一郎訳(1976)『自然現象と心の構造—非因果的連関の原理』海鳴社

湯浅泰雄(1981・初 1977)『身体』創文社

湯浅慎一(1978)『知覚と身体の現象学』太陽出版

菅孝行(1981)『関係としての身体』れんが書房新社

市川浩(1990・初 1984)『<身>の構造—身体論を超えて』青土社

加藤信朗(1996)『ギリシア哲学史』東京大学出版会

日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部(2000)『日本国語大辞典』第二版第 1 巻小学館

村上春樹(2004・初 2002)『海辺のカフカ』(上)講談社

JAY RUBIN (他)(2009)『1Q84 STUDIES BOOK1』若草書房

平居謙(2010)『村上春樹の『1Q84 BOOK3』大研究』データハウス

風丸良彦(2010)『集中講義『1Q84』』若草書房

ユリイカ(2010)『ユリイカ総特集村上春樹『1Q84』へ至るまで、そしてこれから』第 42 巻第 15 号青土社

松本長彦(2011)「心と身体—ヨーロッパ哲学に於ける心身二元論の考察」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』30

日本近代文学会関西支部編(2011)『村上春樹と小説の現在』和泉書院

柴田勝二(2011)『村上春樹と夏目漱石—二人の国民作家が描いた<日本>』祥伝社

佐野正俊・馬場重行(2011)『<教室>の中の村上春樹』ひつじ書房

References

- Guthrie, W.K.C. Trs. by Shikibu, H. and Sumida, H. (1996) *Girishia no tetsugakushatachi*. Risosha, Japan
- Ichikawa, H. (1977) *Seishinto shitenno shintai*. Keisoushobo, Japan
- Jung, C.G. and Pauli, W. Trs. by Kawai, H. and Murakami, Y. (1976) *Shizengensho to kokoro no kozo: Hiingatekirenkan no genri*. Kaimeisha, Japan
- Yuasa, Y. (1981) *Shintai*. Sobunsha, Japan
- Yuasa, S. (1978) *Chikaku to shintai no genshogaku*. Taiyo shuppan, Japan
- Kan, T. (1981) *Kankei toshitenno shintai*. Rengashobo shinsha, Japan
- Ichikawa, H. (1990) *Mi no kouzo: Shintairon wo koete*. Seidosha, Japan
- Kato, N. (1996) *Girishia tetsugakushi*. Tokyodaigaku syuppankai, Japan
- Hirai, K. (2010) *Murakamiharuki no "IQ84 BOOK3" Daikenkyu*. Detahausu, Japan
- Kazemaru, Y. (2010) *Shuchukougai "IQ84"*. Wakakusashobo, Japan
- Yuriika (2010) *Yuriika soutokushu Murakamiharuki "IQ84" he Itarumade soshitekorekara*. 42-15, Seidosha, Tokyo, Japan
- Matsumoto, N. (2011) *Kokoro to shintai: Yoroppatetsugakuni okeru shinshinnigenron no kosatsu*. Ehime daigaku houbungakubu ronshu: Jinbunkagakuhon vol.30
- Nihonkindsaibungakukai kansaishibuhon (2011) *Murakamiharuki toshosetsu no genzai*. Izumishoin, Japan
- Shibata katsuji (2011) *Murakamiharuki to Natumesouseki: Futarino kokuminsakka ga egaita "Nihon"*. Shodensha, Japan
- Sano, M and Baba, S. (2011) *"Kyoshitsu" no nakano murakamiharuki*. Hitsuji shobo, Japan

※2012年2月28日受理 2012年5月5日審査通過

編集委員會

召集人 曾秋桂
副召集人 許均瑞 林青樺
編集委員 鄭婷婷 蘇文郎 楊錦昌 王世和 林雪星 范淑文
陳淑娟 馬耀輝 劉長輝 陳文敏 內田康
堀越和男
執行編輯 廖育卿 落合由治
助理編集 劉于涵

台灣日本語文學報 31

論文と教育研究報告の投稿に関する外部審査の結果、全投稿 17
本中、12 本が掲載された。今号の掲載率は 70.6%である。

台灣日本語文學會

台灣日本語文學報 31

出版者：台灣日本語文學會

理事長 曾秋桂

會 址：25137 台北縣淡水鎮英專路 151 號

淡江大學日本語文學系

傳 真：(+886) 02-2620-9915

網 站：http://www.geocities.jp/taiwan_nichigo/

出版日：2012 年 6 月 30 日

ISSN 1727-2262

JOURNAL OF JAPANESE LITERATURE & LANGUAGE IN TAIWAN 31

CONTENTS

Foreword

- Tseng, Chiu-kuei The 31st publication foreword..... 1

Special contribution

- Shibata Shoji Japanese literature in globalization age:
Murakami Haruki, Tawada Yoko, Levy Hideo..... 3

Research Articles

- Tseng, Chiu-kuei A body desire of Tengen and Aomame in Haruki Murakami's '1Q84':
Based on androgynous of Plato..... 29
- Lai, Jiin-chiueh The meaning and sentence type of time adjective:
Consideration by Japanese corpora..... 55
- Wang, Shih-ho Exploring the Function of Lexical Reiteration in Articles..... 81
- Huang, Yi-wen The Color Words in Mizuru Nisikawa's Novels..... 105
- Chen, Chien-wei The Acquisition of the Aspectual Form -teiru by Taiwanese Learners of Japanese:
Longitudinal Study Based on Data from the Corpus of Taiwanese Learner of
Japanese..... 127
- Ochiai Yuji Physical-representations seen in the printing advertisement of
"Taiwan Nichinichi Shinpo"..... 153
- Pan, Hsin-ying The Impact of the Prosody Education on Accent Perception..... 179
- Yang, Meng-syun Learning Difficulties and Motivation of Japanese Language Non-Major
Students in Taiwan..... 201

Survey Articles

- Lee, Tsui-fong Examining the Impact of Length of Shadowing Assignment and the Growth
rate in Listening ability: To focus on Monologue materials 227
- Kobayashi Yuki Investigation of Peer Reading in Literary Reading: A Case Study of Advanced
Learners in Taiwan..... 247
- Chen, Tzu-ching Application of Conversation Classes in Verbalizing Complex Feelings:
A Case Study of "When He / She Dumped Me" 273
- Kawai Rie The Results and Difficulties of the Self-learning Pronunciation by Dubbing... 295
- Yang, Yu-wen

Activities Report

- Abstract of reports in regular meetings..... 321

June 2012

JAPANESE LANGUAGE & LITERATURE ASSOCIATION OF TAIWAN